

国際協働プロジェクトにおけるグループ活動
 ～自己評定アンケートによる調査結果～
Group Activities of International Collaboration Projects
 ～Survey Results of a Self-Assessment Questionnaire～

吉田信介（関西大学外国語学部）

キーワード 国際協働、グループ・アクティビティー、自己評定／**International Collaboration, Group Activities, Self-Assessment Questionnaire**

1. はじめに

国際コミュニケーションツールとしての ICT を効果的に活用し、グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワークなどのアクティブ・ラーニングの手法を用いて、他者と協働しながら新たな価値を生み出すという国家的規模の教育への要請に鑑み、英語教育においても、学生・生徒自らがグローバルな視点で課題を発見し、異文化の相手と交渉し、結果を表現できることが求められている（教育課程企画特別部会、2015）。

そこで影戸氏を中心とする大学教授、高校教諭らからなる実行委員会は、アジアにおける言語と文化の異なる国際パートナー同士（例：台湾×日本チーム）が、リンガフランカとしての英語を用いて、一つの課題について、遠隔 ICT、ならびに対面による異文化交流、討論、交渉、問題解決を行い、その結果を国際協働プレゼンテーション大会で合作による発表（英語による8分間の発表と、フロアとの5分間の質疑応答）することを通じて、アジアにおいて共に生きるためのアクティブ・ラーニングを実践している。これは毎年2回、夏期に日本にて、冬期に台湾にて開催され、発表課題例としては、Building Human Bonds in the Internet Age、21st Century Skills、Strengthening Connections into the Future、等がある。毎回アジア約8カ国（日本、台湾、カンボジア、フィリピン、マレーシア、インドネシア、韓国、中国）から約30校、約300名の高校・大学生が一堂に会し、ホームステイによる国際交流を兼ねた活動を行っている（影戸、2019）。

これらの活動を通じて判明したことは、他者と協働しながら新たな価値を生み出すことについては、コンフリクトをネゴシエーションしながら解決していくのが困難で、そのためには国際交渉力が必要であることへの気づきが見られたことであり、事前の国内チームでの打合せの結論と、相手国チームの考え方のすり合わせが困難であったこと、Skypeなどの遠隔 ICT では、交渉方法に限界があること、現地での対面による打合せで初めて相手の真意がくみ取れたこと、単なる Introduction Body Conclusion の分担合作ではお互いのアイデアがちぐはぐになり、結局最初からプレゼンテーション全体のアイデアの再設定をする必要が生じたこと、初期段階でのブレインストーミングに多くの時間と労力をかけることで、全体の主旨がより明確になること、国際交渉において必ず起きる葛藤（conflict）に必要な交渉力については、意見が対立する2者間で、A) 回避・B) 対決・C) 宥和・D) 妥協・E) 協働の交渉次元が創出されるが、現行の国際協働プレゼンテーション大会では、ほぼ全員が B、D、E の順、つまり、あるテーマをもとに2つの国際チームが協働で一つの結論を導く交渉プロセスとして、まず意見の対立があり（B：対決）、次にお互いに意見の駆け引きと調整をおこないながら（D：妥協）、最終的にお互いにとってウィンウィンの次元（E：協働）にまで高めていったことが判明した（吉田信介、2017）。

このように、国際協働プレゼンテーション大会においては、国内チームという同一言語・文化の

集団内での活動における葛藤を乗り越えると同時に、国内チームと国際パートナーチームとの間で、互いに異文化である外部集団との活動と葛藤を乗り越えていかねばならず、合意形成までの道が相当険しいといえよう。そのため、議論がたびたび暗礁に乗り上げたり、リーダーまかせでチームへの貢献度が少ないフリーライダーが出現したり、情報量の落差のため相手チームへの不信感がつのったり、集団内での調査を重視するが故の集団浅慮等、問題が多数発生してきたのも事実である。中でも国際協働作業を行う際に、特に慎重に配慮しなければならないのは、意見の衝突が発生した際、純粋な論理のやり取りとはならず、文化的差異によるものとして扱ってしまうことで、議論が表層的なものに終わってしまうことである。そこで、グループ・ダイナミクスの観点から、Zander A.の研究における集団、および集団間の在り方、集団活動の方法、関係性を紹介し、効率的かつ適正な集団行動の在り方への示唆を得ることで、今後とも継続的に実施していく国際協働プレゼンテーション大会の在り方を根本的に見直した。その結果、1) チーム同士の討議と意思決定における議論の進め方においては、公正、正確、正義、平等、合理性をモットーとして、多くの選択肢から両者の類似点、共通点を見出し、問題解決を導き出すこと、2) 葛藤があった場合には、共通見解や同意点を明らかにしていくことで、不一致の核心にある主要な問題点を把握し、両チームに確認し、問題を解決するためにできることを討議すること、3) さらに深刻な葛藤が発生した場合には、接点葛藤解決モデルを採用し、ほとんど感情を交えずに話し合うことができ、争いの解決策を展開することができること、という考え方を採用し、今後の国際協働プレゼンテーション大会の活動で実践することで、ウィンウィンの成果をあげることができると判明した(吉田信介、2018)。

2. 目的

次の段階として、国際協働プレゼンテーション大会の準備段階におけるグループ活動(ホスト校+相手校)において、コンフリクトから合意形成に

いたるまで、葛藤、回避、宥和、妥協、協働などが発生し、そこからグループ活動の在り方について、多くの学びや気づきが生じていたと推察されるが、それらのことの内容について、より直接的に当事者の行動を探るため、各グループの生徒・学生にアンケートによる自己評価を実施した。その結果からグループ活動の実態を詳細に把握することで、表舞台の裏で何が起きているのかについて教員が把握し、より良い支援ができると同時に、生徒・学生にとってはグループ内での葛藤と協働を「見える化」することで自己改善が促進されることが期待できる。しかるに、今後の国際協働プレゼンテーション大会における準備段階での活動における適格な指針を得ることで、ますます進化させることができる。

3. 方法

コミュニケーション能力を自己測定するため、次の8つのカテゴリー(計60問)、1) グループ評価、2) ネットミーティング評価、3) 成功するグループの活動、4) グループメンバー間コミュニケーション、5) 話を聞く能力、6) 非言語伝達能力、7) 総合的なコミュニケーション能力、8) グループによる合意手順からなるアンケート(Beebe & Masterson, 2012: 資料参照)を実施し、集計、分析、考察を行った。

4. 結果と考察

4.1. アンケート回答者数

- 1) 性別: 女性19名、男性11名、合計30名
- 2) 学年: 高1-10名、高2-6名、高3-4名、大1-3名、大2-2名、大3-1名、大4-4名
- 3) 参加回数: 1回目: 18名、2回目: 6名、3回目: 5名、4回目: 1名

4.2. カテゴリー別結果 (図1参照)

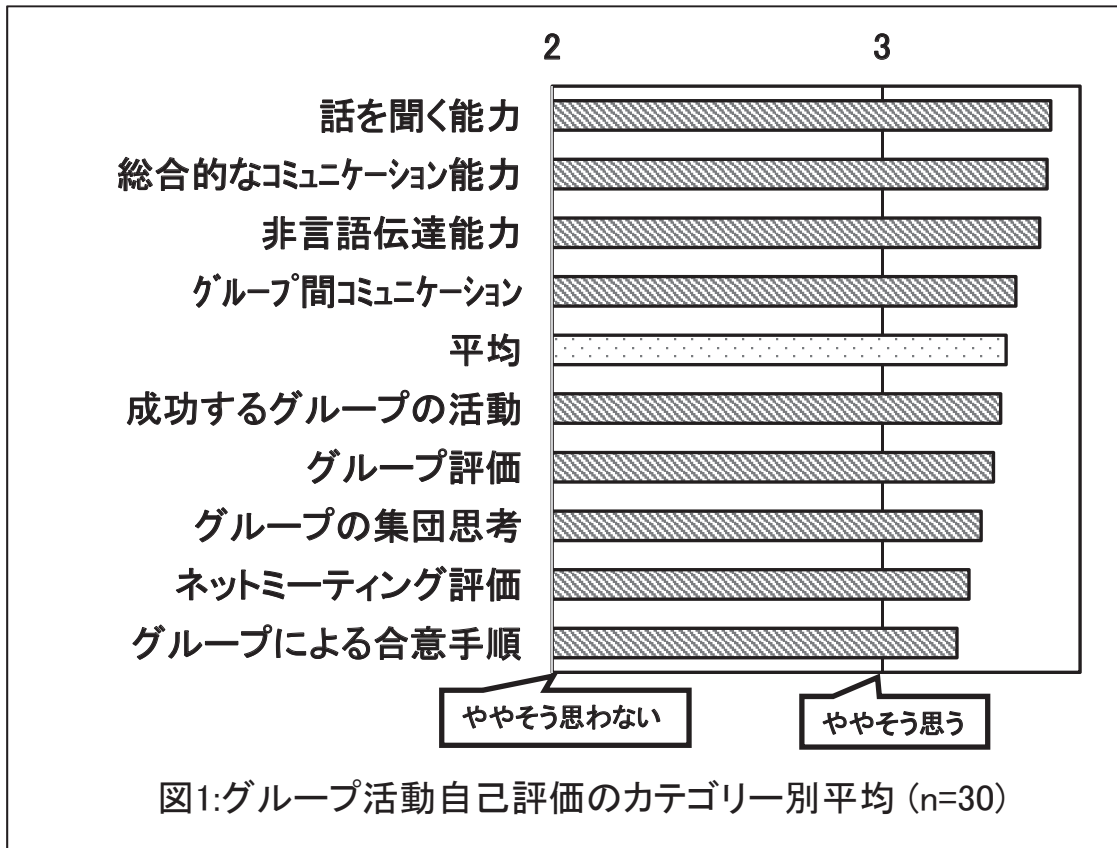
- 1) 平均より高いカテゴリー: 最上位から「話を聞く能力」、「総合的なコミュニケーション能力」、「非言語伝達能力」、「グループメ

ンバー間コミュニケーション」の順であった。

- 2) 平均より低いカテゴリー：最下位から「グループによる合意手順」、「ネットミーティング評価」、「グループの集団思考」、「グル

ープ評価」、「成功するグループの活動」の順であった。

これらから、コミュニケーション能力は高いが、グループによる活動手順、思考、評価が、必ずしも成功しているとはみられないことがわかった。



4.3. 項目別結果

全項目を評価の高い順に並べた（図2参照）平均=3.3で、全て、「そう思う=4」、もしくは「ややそう思う=3」であり、これは、参加者のグループ活動の意識がかなり高かったといえよう。

しかしながら、上記にのべたように、平均を挟んで、2つに分かれていたが、さらに詳細な分析を行うことで、具体的な評価の高低について検討する。そのため下図のうち上位15項目、下位15項目のそれぞれについて詳細をみていく。

4.4 上位25%：高評価順（表1）

上位では、協働、情報共有、言語・非言語による適切なコミュニケーションの取り方、ICTの活用、理解しあっていない場合の要約・言い換え・

明確化などの方法がとられていたことが判明した。すなわち：

- 1) 全体的にみて他のメンバーとコミュニケーションがとれたこと、
- 2) 相手の意図を読み取ることができたこと、
- 3) 非言語により（ジェスチャー、顔、声、空間）コミュニケーションがとれたこと、
- 4) グループメンバー間では、正確、適切、確認による誤解の回避、適切な頻度でコミュニケーションがとれたこと、をそれぞれ意味する。

なお、55と10は理解への工夫で、コミュニケーションの取り方の工夫といえよう。

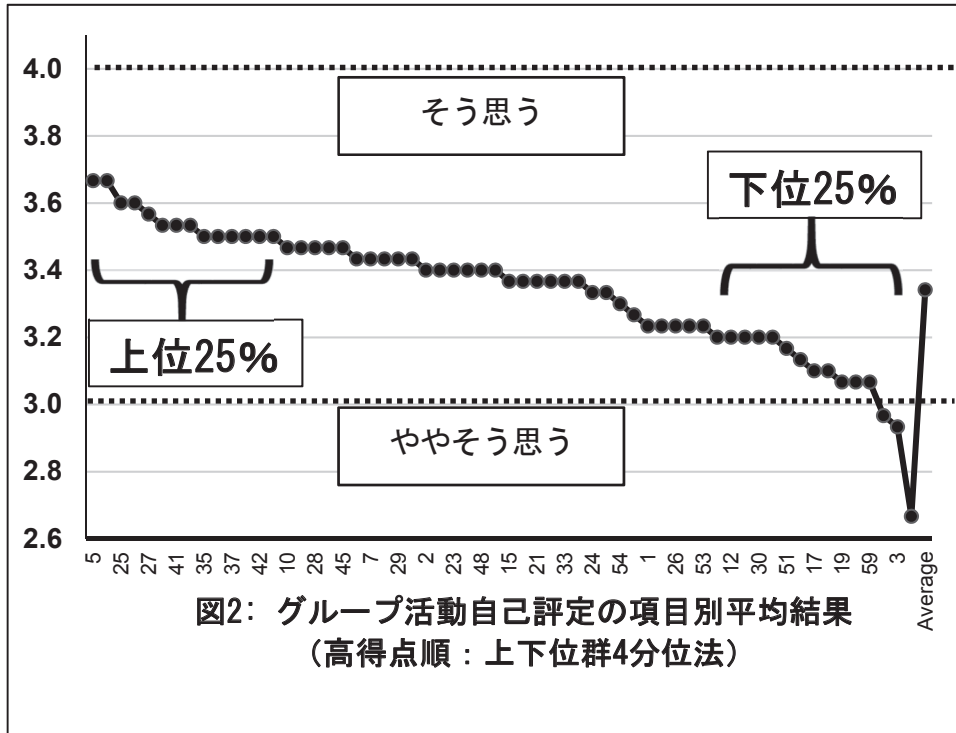


図2: グループ活動自己評定の項目別平均結果
(高得点順: 上下位群4分位法)

表1: グループ活動自己評定結果 (高評価順)

項目 No.	評価点	項目内容 (高評価順)
5	3.7	私たちのグループには、互いに相手を受け入れる気風があった。私たちは互いに称賛しあった。私たちは衝突を肯定的・協力的にとらえていた。私たちはうまく協力しあっていた。
14	3.7	私たちのグループは、お互いにデジタルメッセージを活用した。
25	3.6	私たちは、集めた情報を全メンバーと共有した。
32	3.6	グループメンバーは、IT技術(LINEなど)で適切な方法でコミュニケーションをとった。
27	3.6	私たちは、メンバーの積極的貢献について、言葉や表情により明白な称賛を示した。
34	3.5	グループメンバーは、他のメンバーの聞くスタイルに合わせてコミュニケーションをとった。
41	3.5	グループメンバーは、適切な座席配置により、開放的、相互交流ができるようにした
44	3.5	全体的に見て、グループメンバーは、適切に他のメンバーとコミュニケーションがとれた。
35	3.5	グループメンバーは、効率的にお互いの言うことを聞いた。
36	3.5	グループメンバーは、他のメンバーの意図を正確に理解したことを示すため、自分の言葉で適切かつ正確に言い換えた。
37	3.5	グループメンバーは、適切なジェスチャーを使用することによって、他のメンバーの関心を引き、サポートを得た。
38	3.5	グループメンバーは、適切な顔の表情を使用することによって、他のメンバーの関心を引き、サポートを得た。
42	3.5	グループメンバーは、他のメンバーの非言語的行動をよみとり、理解できた。

55	3.5	私は、グループのメンバー同士が互いに理解しあっていない場合、要約、言い換え、明確化を行った。
10	3.5	私たちのグループは、他のメンバーに理解されるよう、明確、簡潔なメッセージを送った

4.4. 下位 25% : 低評価順 (表 2)

下位では、11 を除き、グループによる活動手順、思考、評価が必ずしも成功しなかったことが判明した、すなわち：

- ① メタ議論による議論の方向修正、要約・言い換え・明確化、全員勝ちの発想、コンフリクト時の回避の回避、合意点の発見の口頭伝達、選択肢とアイデアの提示がうまくなされなかったこと、
- ② ネットでは、手順とルール決定、活動の分割化、明確簡潔なメッセージ、締め切りの設定と順守、などがスムーズにいかなかったこと、
- ③ 論理的思考、定期的で正確な質の高い決定、間違いの修正、圧力のない意思決定、決定事項の定期的チェック、リーダー格への迎

合の回避、などの思考がなされなかったこと、

- ④ グループが、明確に目標と任務を定め文字化、自己の役割や課題の周知、熟練したメンバー、共通目標への意思統一、コンフリクトの肯定的受け止め、高品質作品への理想、相互称賛、有能なリーダーの存在、があまりみられなかったこと、
- ⑤ 活動前の十分な自己・他己開示、目標の文字化、情報収集の計画、情報の精査・問題解決策。集団的決定のプロセス、組織的活動のための段階的・構造化プランの策定、情報共有、論理的理由付けによる解決策の意思決定、言語と表情による称賛、があまりなされなかったといえよう。

表 2 : グループ活動自己評価結果 (低評価順)

項目 No.	評価点	項目内容 (低評価順)
11	2.7	私たちのグループは、頻繁なメッセージを個別のメンバーに送った。
3	2.9	私たちのグループは有能で熟練したメンバーで構成されていた。各グループメンバーは、目的を果たすことができる理想的な力を持っていた。
58	3.0	私は、グループが行き詰まり、対立が激しくなったとき、全メンバーが議論に参加するよう促した。
59	3.1	私は、ただ対立を避けるために意見をすぐに変えず、むしろグループが行き詰った際、問題を解決しようとした。
52	3.1	私は、グループが目標を見失ったり、逸脱したりすると、原点に戻るよう提案した。
19	3.1	私たちは、活動を組織化し始める前に、各メンバーと知り合うのに時間を費やした。
50	3.1	グループメンバーは、率直に意見を述べ、リーダー、(いわゆる) 有力者、声の大きいメンバーに容易に同意しなかった。
17	3.1	私たちのグループは、各作業の締め切りを守った。
9	3.1	私たちのグループは、最初、ネット上での意思決定の手順とルールを決めた。
51	3.2	私は、グループが合意形成の過程と手順をよりよく意識できるよう、「どう議論するかについて議論」した。
60	3.2	私は、グループが合意に達することができないとき、様々なアイデアと選択肢を広げられるよう促した。
30	3.2	グループメンバー間で、誤解がほとんどなかった。

16	3.2	私たちのグループは、各作業の締め切りを設定した
12	3.2	私たちのグループは、大きな活動をより小さい活動に分割した。
8	3.2	私たちのグループには、活動を推進する有能なリーダーがいた。私たちのリーダーは熟練していて知識も豊富であった。リーダーは他のグループメンバーのニーズに敏感であった

4.5. 自由記述の分析 (表3)

自由記述を分類すると、大きく分けて、ICTの活用、気づき、協働、言語・非言語の4つに分類できることが分かった。この中で特に

- 「協働」では、
- ① 英語力や能力の差を全員で補完しながらプレゼンを成功させた成功体験、
 - ② 作業の結果以上に重要なプロセスにおける真の国際交流が不足することによる本末転

倒への警告、

- 「言語」では、
- ③ 身内・パートナーとの両方の議論をリンガフランカとしての英語で統一することによるイベントのハイレベル化、
- 「気づき」では、
- ④ 本番と同様のリハーサルからの気づき、こころのゆとりの重要性と、自分の殻からの抜け出し、などの重要な指摘がなされた。

表3：自由記述の結果

大項目	項目	自由記述
ICT 活用	ICT活用	ネットツールを積極的に使って交流を行った。
ICT 活用	What's app やメッセージングの提案	国ごとに違ったアプリケーションを使用することで、適切なコミュニケーションが図れるのではないか。例えば、Skype だけでなく、What's app やメッセージングを使用するなど。
気づき	本番リハならではの気づき	実際に全員で練習してみてもからの気づきや内容変更が予想以上に時間がかかったため、もう少し全員で練習する時間が必要であると感じました。
気づき	周到的準備と心のゆとり	事前準備と心のゆとりが大切。
気づき	コミュニケーション力と理解力	コミュニケーションの重要性、互いに理解しあうことの大切さ
気づき	内容の深さ不足	今回のプレゼンの内容、文章は少し対象年齢が低めだったと思いました。私たちはただ「音楽で幸せになれる」ということを伝えただけなので、もっと論理的な根拠から結論を考えていくことをするべきだと思いました。
気づき	自分の殻から脱出する勇気と行動	自分の殻に籠もらず、殻から抜け出す勇気、行動力が大事だと思った。
気づき	役割分担と計画性	各メンバーの役割を明確にして、早めに計画を立てることが大切だと思いました。
気づき	情報共有	情報共有することが必要不可欠
気づき	伝達・連携不足	ファシリテーションの時間でもっと WYM に向けた動きをたくさんした方がいいと思った。各係の伝達不足や連携不足が目立ったから。
気づき	事前準備不足	夏休み前までの全体での定例会の内容が薄かった。

協働	英語力の差を克服	私達のパートナー校に英語が殆ど出来ないメンバーがいました。そのメンバーは内容を理解するにも、英語でコミュニケーションを図るにも苦勞していました。結果的に、みんなでサポートしてプレゼンを成功させることは出来ましたが、WYM 全体を通してかなり苦勞していました。また WYM は ASEP に比べて参加されている方々のレベルが高いように感じました。彼は彼なりに WYM を通してかなりの達成感と成長を得たと話をしておりましたが、WYM に参加するメンバーの英語力の最低基準を設けてもいいのではないかと感じました。
協働	各成員の凸凹な能力を結集	初めの二日間ほど意欲がメンバー間で異なり、衝突こそないものの実力差も含めて若干の溝が生じていた。その後、能力が高い人だけで進める案も出たが全員のクオリティーが上がらなければならないことを再認識し、褒める、休憩時間を調節する、頻繁に話しかけるなど工夫をして最終的に全員の能力を最大限に活用することができた。
協働	年齢差の克服	メンバーに中学生もいましたが、積極的に発言をしてくれたおかげで、年齢の差は感じず仲良く話し合うことができました。年齢の差が大きく出てしまうプログラムですが、全員が積極的に発言をすることが大切だと感じました。
協働	人間同士のつながり力の育成	「人と関わり、人と接する力」これがすごく試されたイベントだと思った。
協働	時に時間をかけて深く知り合う	グループ活動において、目的達成のために効率的な活動が多く求められがちだが、それが全てではないということに気づいた。時にはわざと時間をかけることで、グループメンバーの関心を1つに引き付けるといった技も使える。作業が早く進めばそれは良いということではない。互いをよく知ることが一番大切である。その為には、しっかりと時間をかけるべき。
協働	1校による内容決定への反省	A校だけで発表のテーマを決めてしまったので、他の高校の発表よりも浅い論点になってしまったように感じた。よりはやい段階で、テーマについて全員で議論できるようにしたい。
言語	身内とも常に英語で話す	議論などをする際に、パートナーの学校の生徒同士が現地の言葉でやりとりする場面があり、意見が汲み取れない部分もあったので、全体が理解できるように会話なども英語で行うなどお互いが理解できる言語に統一して活動を行えば、よりハイレベルなものに仕上がると感じた。
言語	英語のみで相互理解する機会	英語が苦手ながらもジェスチャーではなく、英語で必死にコミュニケーションを取ろうとしていたひとが多く、非常に良い機会を WYM はあたえてくれたと思う。
言語	話しかけるように発表	話しかけるように話すと思う
言語	英語力不足自責の念	台湾の人たちとのコミュニケーションで、自分が実力不足だったため、台湾の人たちに迷惑をかけてしまった。もっと沢山英語を学んで外国の人たちと自然に楽しく交流出来たらいいと思った。
非言語	英語+αで伝える力がつく	いつも学校では日本人同士でのグループ活動がほとんどなので、困ることはなかなかありませんが、今回はグループ内での言語が英語だったので、より正確に何が言いたいのかを伝えるのに少し苦勞しました。しかし、それを解決するために、わかりやすい例を出したり、絵に表したり、漢字を使ったりとしたことによって、英語だけでは図れない明確さを確かなものにすることができたと思います。

5. 結論

今回、ASEPに参加した学生・生徒は、自己評価ではあるが、英語によるコミュニケーション能力は高いが、一方で、グループ活動においては、協働、情報共有、言語・非言語による適切なコミュニケーションの取り方、ICTの活用、要約・言い換え・明確化ができるグループと、活動手順、集団思考、自己評価そのものができなかったグループに分かれることが判明した。このことからグループ活動においては積極性、インタラクティブ力、ICT力、言い換え力に優れたものがグループをリードしていき、集団内での手順、思考、評価ができないものは取り残されていくという重要な示唆を得た。自由記述からは、互いの英語力の差を国際協働で克服することが真の国際交流につながることで、同国語使用者間でもリンガフランカとしての英語で意思疎通をはかることの大切さ、リハーサルによるこころのゆとりを持ち、自己の殻から抜け出す勇気をもつこと、などアン

ケートだけからでは明らかにならなかったことが指摘され、参加者の意識の高さを物語るものであったといえよう。

今後の課題として、実際の交渉場面をデジタルで記録し、会話分析を行うことで、自己評価だけでは見えなかった部分を客観的に解明し、主観・客観の両面から国際協働プロジェクトにおける理想的なグループ活動のあり方を提示していく。

参考文献

- Beebe, S. & Masterson, J. (2012) *Communicating in small groups*, Boston, USA.
 影戸誠 (2019) Kageto Makoto's Home Page [www.kageto.jp] (2019.1.15 入手)
 教育課程企画特別部会教育課程企画特別部会 (2015) 論点整理 関係資料 資料5-2, p.20 [http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2015/08/10/1360841_5_2_1_1.pdf] (2019.1.15 入手)
 吉田信介 (2018) 「国際協働プロジェクトにおけるグループ・ダイナミクス」『関西大学高等教育研究』第9号、関西大学教育開発支援センター pp.167~176

【資料】：自己評価アンケート項目

(Beebe & Masterson, 2012 を筆者が翻訳)

グループ評価

1. 私たちのグループは明確にその目標と任務を設定していた。各グループメンバーは、実行すべき活動と作品を完成させる責任を常に意識していた。そのため、例えば活動目標が「文字」で書き留められ、議論の間、常にそれを意識していた。
2. 私たちのグループはよく組織化されていた。各グループメンバーは、自分の役割や課題が何であるかを知っていた。結果第一とし、無関係な事に時間を費やすことはなかった。
3. 私たちのグループは有能で熟練したメンバーで構成されていた。各グループメンバーは、目的を果たすことができる理想的な力を持っていた。
4. 私たちのグループは意思統一されていた。全員、共通目標を達成するよう心がけていた。私たちは、団結していた。グループ全員による意見の一致の重要性について話していた。
5. 私たちのグループには、互いに相手を受け入れる気風があった。私たちは互いに称賛しあった。私たちは衝突を肯定的・協力的にとらえていた。私たちはうまく協力しあっていた。
6. 私たちのグループは、高品質の作品を完成させる理想をもっていた。私たちは高品質な活動をする重要性について話していた。良い活動するのは全グループメンバーにとって重要であった。
7. 私たちが行った良い活動は称賛された。私たちはお互いに称賛し合い、それは各グループ内で有意義な方法で称賛された。私たちが仕上げた高品質な作品について、支持され、認知され

た。

8. 私たちのグループには、活動を推進する有能なリーダーがいた。私たちのリーダーは熟練して知識も豊富であった。リーダーは他のグループメンバーのニーズに敏感であった。

ネットミーティング評価

9. 私たちのグループは、最初、ネット上での意思決定の手順とルールを決めた。
 10. 私たちのグループは、頻繁なメッセージをグループ全体に送った。
 11. 私たちのグループは、頻繁なメッセージを個別のメンバーに送った。
 12. 私たちのグループは、大きな活動をより小さい活動に分割した。
 13. 私たちのグループは、大きな活動をより小さい活動に分割し、メンバーが分担して作業した。
 14. 私たちのグループは、お互いにデジタルメッセージを活用した。
 15. 私たちのグループは、他のメンバーに理解されるよう、明確、簡潔なメッセージを送った。
 16. 私たちのグループは、各作業の締め切りを設定した。
 17. 私たちのグループは、各作業の締め切りを守った。
 18. 私たちのグループは、常につながっている状態を保つため、デジタル機器の特性を理解し、適切に活用した。

成功するグループの活動

19. 私たちは、活動を組織化し始める前に、各メンバーと知り合うのに時間を費やした。
 20. 私たちは、メールアドレスなど個人情報を交換した。
 21. 私たちは、目標を文字化し、全メンバーと共有した。
 22. 私たちは、目的を果たすのに必要な情報を集めるための計画を立てた。
 23. 私たちは、情報を十分分析した上で、問題の解決策を発見し、集団的決定を行った。
 24. 私たちは、活動を組織化するために、段階的な構造化されたプランを開発した。
 25. 私たちは、集めた情報を全メンバーと共有した。
 26. 私たちは、論理と理由付けを十分検討した上で、解決策の組立、または意思決定を行った。
 27. 私たちは、メンバーの積極的貢献について、言葉や表情により明白な称賛を示した。

グループメンバー間コミュニケーション

28. グループメンバー間で、正確にコミュニケーションがとれた。
 29. グループメンバー間で、適切な情報量を伝えることができた。
 30. グループメンバー間で、誤解がほとんどなかった。
 31. グループメンバーは、誤解が起きたとき、意味を再度明確にし、正確な伝達に努めた。
 32. グループメンバーは、IT技術(LINEなど)で適切な方法でコミュニケーションをとった。
 33. グループメンバーは、適切な頻度で他のメンバーとコミュニケーションをとった。

話を聞く能力

34. グループメンバーは、他のメンバーの聞くスタイルに合わせてコミュニケーションをとった。
 35. グループメンバーは、効率的にお互いの言うことを聞いた。
 36. グループメンバーは、他のメンバーの意図を正確に理解したことを示すため、自分の言葉で適切かつ正確に言い換えた。

非言語伝達能力

37. グループメンバーは、適切なジェスチャーを使用することによって、他のメンバーの関心を引き、サポートを得た。

38. グループメンバーは、適切な顔の表情を使用することによって、他のメンバーの関心を引き、サポートを得た。
39. グループメンバーは、適切な声の表現を変えることによって、他のメンバーの関心を引き、サポートを得た。
40. グループメンバーは、適切な空間と距離をとって他のメンバーとコミュニケーションをとった。
41. グループメンバーは、適切な座席配置により、開放的、相互交流ができるようにした。
42. グループメンバーは、他のメンバーの非言語的行動をよみとり、理解できた。

総合的なコミュニケーション能力

43. 全体的に見て、グループメンバーは、正確に他のメンバーとコミュニケーションがとれた。
44. 全体的に見て、グループメンバーは、適切に他のメンバーとコミュニケーションがとれた。

グループの集団思考

45. グループメンバーは、根拠を吟味し、論理的思考を行うよう、他のメンバーを励まし、ほめた。
46. グループメンバーは、定期的に、正確で質の高い決定をしているかどうか自問自答した。
47. グループメンバーは、時には間違ったり、不正確な結論に達したりしたことを自ら認めた。
48. グループメンバーは、他のメンバーに同意するよう圧力をかけずに意思決定を行った。
49. グループメンバーは、グループの決定が、メンバーによって支持され続けていることを定期的にチェックした。
50. グループメンバーは、ありのままの意見を述べ、リーダー、(いわゆる) 有力者、声が大きいメンバーに容易に同意しなかった。

グループによる合意手順

51. 私は、グループが合意形成の過程と手順をよりよく意識できるよう、「どう議論するかについて議論」した。
52. 私は、グループが目標を見失ったり、逸脱したりすると、原点に戻るよう提案した。
53. 私は、グループが選択肢を見出すよう、解決策、提言、提案を出した。
54. 私は、一貫してI (私) でなく、we (私たち) を用い、協働作業の意識を高めた。
55. 私は、グループのメンバー同士が互いに理解しあっていない場合、要約、言い換え、明確化を行った。
56. 私は、グループのメンバーが合意できる点を発見し、グループ全体に口答で伝えた。
57. 私は、メンバー同士の勝ち負けではなく、全員勝ちになる方法を探した。
58. 私は、グループが行き詰まり、対立が激しくなったとき、全メンバーが議論に参加するよう促した。
59. 私は、ただ対立を避けるために意見をすぐに変えず、むしろグループが行き詰った際、問題を解決しようとした。
60. 私は、グループが合意に達することができないとき、様々なアイデアと選択肢を広げられるよう促した。